Kate Grudpan 研究室への留学

愛知工業大学　上田　実

1 はじめに

2010 年 2 月 2 日から 3 ヶ月間，Chiang Mai 大学の Kate Grudpan 教授の研究室に短期留学をする機会をいただいた。我が師（酒井先生）から本誌に滞在記を寄稿するように勧められ，編集委員長の今任先生の許可を頂き，ここに筆を執った。普段このような文章を書く人間ではないので相当な駄文であることはご了承願いたい。

写真 1　Kate 研の友人
休日は主にこのメンバーで遊んでいた

2 チェンマイでの生活

チェンマイはタイ北部最大の都市で，古い寺院が数多く点在し観光地として有名である。そのため，市内には多くの観光客がいて日本人とすれ違うこともよくあった。私は“タイ”と聞くと，大変失礼ながら発展途上で田舎っぽい街を以前は想像していたが，中心部は大きなショッピングモールもあり以外と栄えていた。

私は，チェンマイ大学の門の前に位置する寮に住むこととなった。ラボまでは歩いて 5 分という近さである。普段車で 1 時間かけて研究室に通う私にとってはうれしいことであった。ただ，部屋には何もない…，テレビ，冷蔵庫，エアコンもない。インターネットが使えるのがせめてもの救いであった。今までいかに恵まれた環境で生活していたかを再確認できた。ちなみに，タイの学生の部屋にはテレビなどはあるがエアコンはないのが当たり前のようだ。夏場の気温は 40 度に達する，そんな所でも人間は扇風機 1 台で生きていけるのである。食事は主に屋台で食べる。1 食 30 バーツ（約 90 円）程度で食べられる。私も Kate 研の友人とともに食事はいつも屋台で食べていた。

写真 2　日本では見ない 6 リットルのペットボトル
取っ手が壊れている，どうやって持つのだろう…
隣は 600 mL のボトル

3 Kate Grudpan 研究室

Kate 研（Chiang Mai Flow Based Analysis Research Group）は，6 つのユニットから成り立ち，先生だけでも 7 人もいるビックラボである。私は Grupan 教授が担当する Unit of

cost-effective analysis approach に所属し研究に従事することとなった。私にとって幸運だったのが，Kate 研には知り合いがいたことである。酒井・手嶋研究室にポスドク研究員や留学生として来ていた人達がいろいろな場面でサポートしてくれた。

4 研究内容

植物由来物質を用いるラボオンチップによるオンライン計測システムの開発を行った。千日紅から抽出した色素を pH 指示薬として用い小型のチップを使った分析システムで酸の定量を行った。詳しくは“Exploiting a Simple Water Extract of a Flower as a Natural Reagent for Acidity Assay Using a Lab-on-Chip”というタイトルで，本誌に論文が掲載されているのでそちらを参照されたい。

5 16th ICFIA へ参加

留学の締めくくりとして 4 月 25 日から 30 日にかけて行われた 16th ICFIA に参加した。会議が行われたパタヤまでは夜行バスで向かうこととなった。チェンマイからパタヤまでバスで陸路 12 時間…。飛行機を使えばもっと早く…。どの国の学生もお金がないのである。25 日の早朝にパタヤに到着, 長距離長時間移動でテンションだだ下がりである。この留学で得たもう一つのもの“長距離バス移動はもうしない”。

会場となったホテルの部屋には今までなかった家電類が全てそろっていた。やっぱ快適, 文明の利器は素晴らしい。夕刻には酒井先生，手嶋先生と再会し久しぶりの“日本語”会話を楽しんだ。

ちなみに私にとって国際会議はこれで 4 回目，さらに 3 カ月間の英語漬けのおかげもあってか今までの国際会議よりはずいぶんましなポスター発表をすることできた。

6 さいごに

“まぁ，なんとかなる”と飛び込んだ今回の留学であったが，あらためて人間 1 人の力は小さいということを実感した。自分の英語力の無さから迷惑をかけたこともあったが，友人たちはいつも笑顔で私に話しかけてくれた。それを支えに 3 ヶ月間無事に過ごすことができた。いつかチェンマイに帰ることを約束して帰国の途に就いた。

謝辞

今回の留学にあたりご尽力を頂きました酒井忠雄教授（愛知工大），手嶋紀雄准教授（愛知工大），Kate Grudpan 教授（Chiang Mai Univ.）に深甚なる感謝の意を表します。また，研究室のすべての先生方，友人に深く感謝申し上げます。